

## 論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Effects of long working hours and shift work during pregnancy on obstetric and perinatal outcomes: A large prospective cohort study – Japan Environment and Children’s Study

和文タイトル: 妊娠中の長時間労働と交替制勤務が妊娠期及び周産期の母子の健康に及ぼす影響についての大規模前向きコホート研究 エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 愛知UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Birth

年: 2019 月: 10 巻: 頁:

筆頭著者名: 鈴木伸宏

所属UC名:

目的:

妊娠中の勤務パターンは、妊娠期及び周産期の母子の健康の望ましくない状態と関係がある可能性がある。本研究では日本において、妊娠中の週あたりの労働時間が、母子の健康状態に与える影響について夜勤回数ごとに明らかにすることを旨とした。

方法:

本研究はエコチル調査参加妊婦99,744人を対象とした。妊娠中の労働時間と夜勤頻度は、第1三半期と第2または第3三半期の2回、自記式質問票により調査した。妊娠中及び周産期の母子の健康状態は、医療機関のカルテ転記により把握した。週の労働時間1-35、36-45、46時間以上、ひと月の夜勤回数0、1-6(第2/3三半期は1-5)、7(同6)回以上の計9群に分け、非労働群を参照群としてオッズ比を求めた。

結果:

労働により切迫流産のオッズ比は最大値1.47(95%信頼区間(95%CI)1.26-1.73)、切迫早産は1.63(95%CI 1.41-1.87))と上昇した。週36時間以上の労働、夜勤ありで妊娠高血圧症候群(2.02(95%CI 1.39-2.93))、夜勤と関係なく吸引又は鉗子分娩(1.34(95%CI 1.22-1.48))、週46時間以上、夜勤ありで胎児発育不全(1.32(95%CI 1.10-1.59))が増加した。一方、妊娠糖尿病、羊水混濁が有意に少なくなる勤務パターンが見られた。

考察:(研究の限界を含める)

労働下で切迫流産は増えたが早産は週1-35時間労働、夜勤ひと月1-6回の群を除き増えなかった。これは医師が切迫流産の診断で絶対安静を指示するためかもしれない。週1-35時間の群は非正規雇用者が多く、この群では第2/3三半期の労働で帝王切開が増える点とあわせ、健康管理状況を調べる必要がある。また、夜勤回数の多い群では切迫流産以外でオッズ比が上昇しなかったが、この群に多い看護職の健康管理が比較的良好であることを表す可能性がある。本研究の限界は、健康労働者効果のように未調整の交絡要因があること、妊婦の多くが妊娠第1三半期後半からの調査参加であるため早期流産への影響が解析不能なことである。

結論:

妊娠中に働くことによって、切迫流産、切迫早産のリスクがわずかに上昇した。また、働き方によっては早産、妊娠高血圧症候群、吸引または鉗子分娩、胎児発育不全のリスクが上昇する場合がある。妊娠を望む女性は、勤務パターンと関係するリスクについて意識することが望ましい。